

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

いいねぶたを作るには……
東北、青森の誇りを胸に、
いつもそのことばかり考えています。

ねぶた師

立田 健太氏



Kenta Tatsuta

ねぶた師。1985年青森県生まれ。中学生のときからねぶた作りを学び始め、その後、市内の高校で臨時講師をしながら、ねぶた師として独り立ちするための努力を重ねている。高校では「ねぶた制作同好会」を通じて、生徒たちにねぶたの魅力を伝えている。

青森最大のイベントといえば、日本有数の火祭りであるねぶた祭。「ねぶた」と呼ばれる巨大で雄大な武者人形の山車が青森市内を練り歩き、その前を踊り手が「ラッセラー」という掛け声も勇ましく跳ねまわる。そして、300万人もの観衆の心を揺さぶる。

立田健太さんは、そんなねぶた作りを担う一人前の「ねぶた師」を目指して、日々修業に励む。14歳でこの道に入り、以来師匠のもと一心にねぶた作りを学んできた。

一 ねぶた師になろうと 思ったきっかけは？

立田「5歳のときに、師匠のねぶた作りを見たのがきっかけです。ねぶたが、どんどん出来上がっていく様子が、子ども心に楽しく感じられたんです。でも何より、祭りでねぶたが練り歩く姿を見て感動したことが大きいですね」

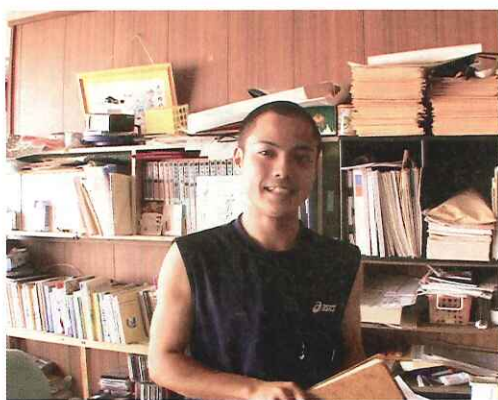
立田さんの師匠とは、20年以上も自作のねぶたを出し続け、これまでいくつもの賞に輝くねぶた作りの第一人者、内山龍星氏のこと。

ねぶた師は、1年のほとんどをねぶた作りに費やす。祭りが終わるとすぐに翌年の構想を立て、下絵(デザイン画)を描き、冬から翌春にかけて針金で大きな型を作る。次に「ねぶた小屋」と呼ばれる作業場で、型の中に木を組んで電球を取り付け、全体を和紙で覆う。そして絵柄を描いて彩色し、祭り直前の7月末にねぶたを完成させる。立田さんは青森市内の高校で臨時講師をしながら、時間の許す限りねぶた作りの技を磨いている。ちなみに、道を究めるのが厳しい世界であるため、ねぶた作りだけで生計を立てられるねぶた師は少ない。

二 サラリーマンになる 気はなかった？

立田「もう頭がねぶたを中心に回っている(笑)。時間的な制約の多い仕事は無理だと思います。いいねぶたを作るには、どうすればいいのか。生徒に教えているとき以外はそればかり考えているんです。もしここで方向転換をしたら、きっと悔いの残る人生になると思います」

その言葉通り、立田さんは自宅にも作業場を構え、常にねぶた研究に貪欲だ。題材についての知識を深めておくために歌舞伎や歴史物語などの書物類が作業場一面に所狭しと立ち並んでいる。



立田「まだそんなに多くはありませんが、日本の伝統文化や歴史に関する資料を集めているところです。この間、神話時代からの歴史を描いた『國史画帖 大和櫻』という戦前の本を東京・神田で手に入れました。ずっと探していたものだったのでうれしかったですね」

もともと、ねぶた師に求められるのはねぶた作りだけではない。何十人も

懐かしくも美しい
日本の俳句

Heartful Haiku Poems

Vol.55

秋立つや小石をはらふ竹箒

東臯



イラスト ひらいみも

七夕は「七月七日の夕べ」を縮めた名である。それをタナバタと読むのは、古代信仰において、神を迎えて一夜を過ごし、この世の穢れを取り去ってもらう役割を「棚機つ女」、つまり機織り娘が引き受けていたからだ。これが、牽牛星（彦星）の運行を農作業のころあいを計る基準とし、織女星（織姫）を養蚕で得られる絹糸や針仕事を司る星とする中国の伝説とひとつになって、婦女が手芸に巧みになることを祈る宮中の儀式へと変化した。武家から庶民へ広がって、秋の年中行事になったのは江戸時代の中ごろであろうか。掲出句は小石を払った竹箒の感触に立秋のさわやかさを見届けた句。秋は四季のなかで最もすばらしい季節

節として、風の音や打ち寄せる波などの自然現象にその到来を感じ取ってきた和歌に対し、庭を掃くという日常的な仕事に秋気をとらえた点が新鮮である。箒が偶然受けとめた小石の軽々と遠くに飛ぶ音が聞こえて、蒸し暑い夏が過ぎ去ったことを再認識する。その感性はきわめて繊細といつてよい。作者東臯は十八世紀後半の俳人。陸奥国東山の人。この地は今の岩手県一関市藤沢町にあたるが、江戸時代は仙台藩領で伊達家の統治。農業兼酒造業の傍ら京都の蕪村に私淑して隠逸を好み、中央俳壇からの評価も高かった。作品は『奥美人』による。

東洋大学教授 谷地快一

日本の伝統・文化を継承する若者たち
「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……。先人たちが築いてきた、その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。夢を追いかけて日々研鑽する彼らの「ひた向きで真摯な姿」と普段の暮らしから垣間見える“素顔”をご紹介します。



動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧いただけます。

Web版

パソコンやタブレット端末など各種デバイスでご覧いただけます。
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV

ディスカバリーチャンネル(CS)



冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」 放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



のスタッフを指揮する役割も要求される。師匠が不在のときは立田さんがその大役を担う。師匠の信頼が厚いことの証しだ。とはいえ、自分の作業をこなしながら全体に気を配り、年上のスタッフに指示を与えるのは簡単なことではない。
2009年の夏——
いよいよねぶた祭本番、天気はあいにくの雨模様だった。

二
雨が降っても
ねぶた祭は
行われる？

立田「もちろん行われます。ねぶたは和紙でできたデリケートな美術品ですから、雨が降ると大きなビニールを被せて練り歩きます。本来の姿を見せられないのは悔しいのですが、相手が天気なので、こればかりは仕方ありません」

幸い、翌日には天気が回復した。立田さんたちスタッフはキリリと鉢巻きを締め、法被をまとい、祭りに加わる。そして大歓声の中、踊り手とともにねぶたを率いて夜の街を練り歩く。今はまだ、そのねぶたには師匠の作品であることを示す札が掲げられている。しかし、そう遠くない日、立田さんの名が印されたねぶたが、青森の夏をより熱くすることだろう。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

取材を終えて

ねぶた小屋で、そして自宅作業場で修業に没頭している立田さん。そんな彼のお気に入りのアーティストが小田和正さん。自宅作業場のドアには小田さんのポスターが貼られ、BGMはもちろん小田さんのCD。「以前からずっとファンで、下絵のアイデアを膨らませるのにも小田さんの歌がいいんですよ」と、少し照れながら答えてくれた姿が印象的でした。

※2009年8月取材。掲載内容は取材当時のものです。



祭り本番はお囃子として加わる立田さん



青森ねぶた祭

青森県青森市で毎年8月2日から7日に開催。国の重要無形民俗文化財に指定されている祭りで、正確な起源は定かでないという。祭りは「ねぶた」と「お囃子」、「跳人(はねと)」と呼ばれる踊り手が1団体となり、パフォーマンスが総合的に優れた団体には「ねぶた大賞」が、最も優れたねぶた制作者には「最優秀制作者賞」が贈られる。

